



## ドイツで開かれた日本の考古学展、そして奈良で開かれる帰国展

ドイツで開催の「日本の考古 - 曙光の時代 - 」(2004年7月～2005年1月)展は、ドイツのマスコミが大きく報道し合計約6万人に見ていただきました。

日本の考古学研究成果を、初めて世界に本格的に発信できました。日本固有の文化や歴史に対する認識が深まり、国際交流に大きく貢献したと思います。

戦後の日本考古学は、高度経済成長期より開発の事前に多くの発掘調査がおこなわれるようになって、目覚ましい発見が相次ぐと共に、遺跡の保存や保護・活用も進み、考古学ブームが起こりマスメディアも盛んに報道を続けています。年間に全国の教育委員会や埋蔵文化財センターなどに勤める7000人を越える専門の職員が1000億円ほどの費用で8500件前後の発掘調査をおこなうという数字が端的に現状を示しています。このような状況はヨーロッパでも大きな関心呼びました。

日本の考古学はドイツに学ぶところが多く、昔から考古学の方法が似ています。理論より型式学に基づいて遺跡・遺物を分析する姿勢です。ドイ



帰国展「曙光の時代 - ドイツで開催した日本考古展 - 」開会式

ツから4年間、大阪大学に留学し都出比呂志教授に学び発掘調査も経験したウエルナー・シュタインハウス氏は、日本の考古学の到達点と発掘調査の現状や仕組み、社会において考古学が果たしている役割などについて展示などを通してヨーロッパに紹介したいと考え、9年前に本国の考古学研究所シューベルト博士や都出教授・田中琢前奈良国立文化財研究所長・佐原真前国立歴史民俗博物館長ら日本の考古学者に相談したのが出発点でした。

すぐさまこの企画が進み日本の考古学を世界に位置付けつつ、生態系の中で変革し連続する歴史を捉え、出土品を一括の歴史資料としてビジュアルにそして立体的に表現しようと基本姿勢と概要を固めました。6年前からシュタインハウス氏は日本に常駐し彼を中心に、資料や復元模型などの所在を調査し出品交渉にも全国に足を運び、展示の具体案が固まりました。レイアウト・デザイン、照明などの展示手法についても、ドイツで各専門家が周到に計画しました。

展示図録は、当研究所が主体になって作成し、特に写真については全国の57カ所の機関に出向き、展示資料を全て新たに撮影し、立体的なレイアウトなど新しい撮影方法が遺憾なく発揮でき、評判も上々でした。出土品や模型などの出品、撮影、各種手配などで全国の自治体・埋蔵文化財センターなど多くの方々の絶大な協力をいただきました。

9年も前から展示委員会を発足させ、十分に検討してきました。学問研究上の位置づけ、社会的な役割、展示に取り組む姿勢や進め方など、日本の現状とは大いに異なっています。ドイツでこの展示を見た日本の考古学者たちは、国内でも今だかつてこのような大規模で内容豊かな考古展はなかったと評価しました。この帰国展は、3月23日から5月8日まで奈良国立博物館で開催されています。(平城宮跡発掘調査部 岡村 道雄)

## 発掘調査の概要

### 藤原宮内裏東官衙地区・朝堂院東地区の調査

#### (飛鳥藤原第 133-11 次)

平成 17 年 1 月 11 日に標記の地区の発掘に取りかかりました。調査区の長さは 135 m に及び、広範な地区にまたがりますが、実はトレンチの幅がわずか 2 m にすぎません。調査地は橿原市高殿町の集落西方 70 m のところを南へ流れる水路にあたります。素掘の水路を改修して U 字溝を設置するという現状変更申請が持ち上がり、その事前確認調査のため、狭長な調査区となりました。調査区北端は内裏の南端東方、同じく南端は朝堂院東第二堂北半部東方にほぼ相当します。

今回の調査区両側はこれまで調査がなされておらず、この未調査区に長い試掘トレンチを入れたこととなります。その結果、すぐ脇を走る市道路路面下 90 cm 前後のところで、藤原宮期と思われる掘立柱建物や掘立柱塀、石組の溝などが見つかりました。遺構の密度は低く、水路による削平のため遺構の残りもよくありませんでしたが、この地区の一端を窺うことができました。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 小池 伸彦)

#### 川原寺の調査 (飛鳥藤原第 133-12 次)

川原寺中金堂と講堂間の西側に位置する光福寺庫裏の建て替えにとまなう事前調査です。平成 17 年 2 月 2 日に重機掘削を開始したところ、地表下 40 cm ほどで巨大な礎石が顔をのぞかせました。上面は平滑で円形の柱座を造り出しており、その直径は約 1 m もあります。これはこれまで発見された川原寺の中金堂や塔、南大門の礎石より大きなものです。このような礎石がコ字形に整然と 6 個並んでいました。建物全体では、南北が礎石 4 個分 (3 間)、東西が礎石 3 個分 (2 間) と推定され、ちょうど建物の東半分にあたります。礎石中心間の距離はおおよそ 2.1 m (7 尺)。巨大な礎石ながら、その間隔が狭いのがこの建物の特徴の一つです。

この礎石の東方と南方には凝灰岩切石列があり、逆 L 字形に接続しています。これはこの建物の基壇 (土壇) の縁を形成する地覆石で、礎石芯からの距離は 2.7 m (9 尺) ほどあります。この距離 (基壇の出) が大きいのが、この建物の 2 つめの特徴

です。ふつう日本の建物では、基壇縁が雨に当たらないよう軒をのばしますから、この建物は軒先が柱から 2.7 m 以上出ていることになり、柱上に複雑な木組み (組物) を備えた立派な建物と考えられます。

現存する法隆寺西院の建物や興福寺の遺跡を参照すると、位置的にみて、発見した建物は川原寺の経楼もしくは鐘楼でしょう。経楼とは寺の経巻を収蔵する建物、鐘楼とは梵鐘を吊る建物のことです。全国的にみても、このような経楼や鐘楼の発掘例はわずか十数件しかなく、しかも 7 世紀末に遡るのは、岐阜県飛騨市の杉崎廃寺くらいです。さらに川原寺のような高い格を誇った古代の国家寺院 (官寺) では、その実態が明確ではありませんでした。今回の建物跡は、日本最古の経楼もしくは鐘楼の遺構であり、しかも官寺の良好な遺構が出土したことで、古代の伽藍建築のあり方を考えるうえできわめて重要な発見と考えています。

以上のような発見の重要性に鑑みて、報道発表をおこない、2 月 22 日には現地見学会を実施しました。調査区周囲に十分な見学スペースを確保できないため、東方に床高さ約 1.5 m の仮設足場を設置して見学者に供しました。平日にもかかわらず、約 600 人が訪れ、巨大な礎石に感嘆し、カメラにおさめていきました。調査担当者による説明は適宜おこないましたが、次々に押し寄せる見学者のため、朝 9 時前から午後 4 時までの解説は計 14 回に達しました。

さらに調査は継続しています。基壇上にある焼土層に多量の瓦が混じるため、創建以降の修復・改造がどれだけ及んでいるかなどが、解明すべき課題です。(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 箱崎 和久)



川原寺の遺構 (東南から)

### 平城宮東院地区の調査（平城第381次）

現在、平城宮跡発掘調査部では、平城宮の東に張り出す東院地区を発掘しています。奈良時代後半の文献史料には「東院」や「東宮」に関する記載がしばしば登場します。「東院」は、皇太子あるいは天皇が住む場所であったとともに、さまざまな儀式や宴会などがとりおこなわれた場所です。

復原された東院庭園は、東院地区の南よりに位置します。庭園を中心にした南側部分は、発掘調査によって区画施設や建物などが見つっていますが、北側部分については、よくわかりません。『続日本紀』に記載されているような「東院玉殿」などの中枢建物は、庭園の北側に存在すると考えられています。

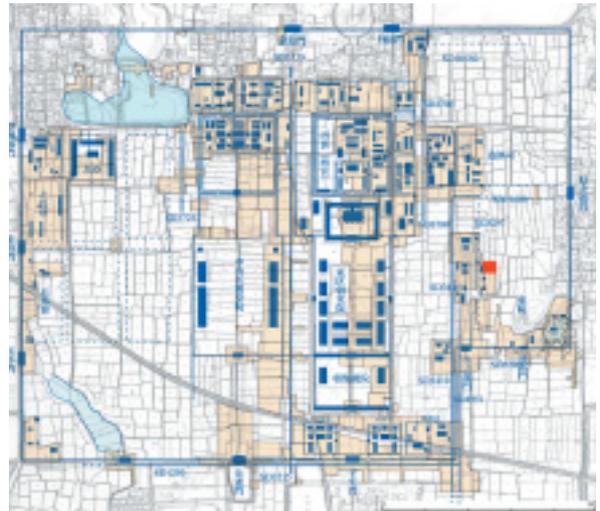
東院地区は1960年代以来、西辺を中心に発掘調査が継続的におこなわれてきました。現在、東院庭園にむかう南北の宮内道路が通っていますが、その部分の調査でも井戸や建物などの遺構が密集していました。とくに1999年度に宮内道路の東側でおこなれた第292次調査では、大規模な建物が見つかりました。規模の大きさと、すべての柱筋の交点に柱がある総柱そうばしらの構造であることから、東院の楼閣宮殿と呼ばれています。この時の調査で総柱建物が北に続くことを確認しました。今回は楼閣宮殿の全容を解明するため、その北側を調査しています。

調査は平成17年1月からはじめました。東側には北から宇奈多うなたり神社にむかってのびる丘陵、西側は水上池みなかみいけからつづく谷地形であるため、今回の調査区は東が高く、西が低い緩傾斜面となっています。

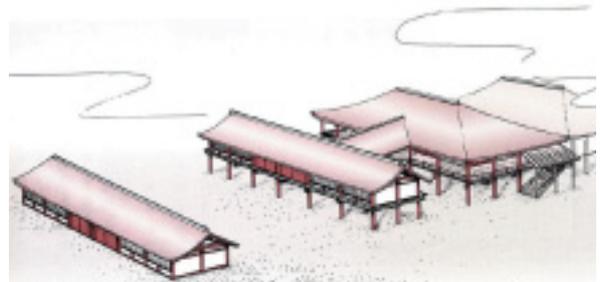
耕作土を掘り下げると、すぐに重複する多くの柱穴を発見しました。検出面はおおむね地山ですが、東側の高い一部に奈良時代の整地土が残っていました。現在は奈良時代の遺構面の精査をすすめているところです。遺構の解釈については、まだ明らかでない点も多いのですが、南側の第292次調査で見つかった主殿と考えられる建物の規模が、当時の所見よりも北に伸びる可能性が高いこと、その北側に同じか、あるいはそれ以上の規模の後殿とみられる総柱建物があることがわかりました。また、この建物（後殿）は南側の建物（主殿）同様、同じ場所で建て替えられていることもわかりました。

そのほかにも、塀や建物の一部とみられる、たくさんの掘立柱が見つっています。周辺の調査でも、東院地区は奈良時代から平安時代初頭にかけて、大規模な建物が何度も建て替えられたことがわかっています。このことは、とくに奈良時代後半、「東院」が平城宮のなかでも、重要な場所のひとつであったことを示しています。今回の調査も、それを改めて確認する調査となりました。

（平城宮跡発掘調査部 神野 恵）



第381次調査区の位置（赤色部分）



東院楼閣宮殿のイメージ（年報1999-Ⅲより）



発掘調査の作業風景（北から）



(原寸)

×	×	×	×	×
〔丑成カ〕	〔庚子危〕	己亥皮	〔戊成丸〕	〔丁酉定〕
×	人出宅大小	往亡天倉重	望天倉小	天李乃井
				天間日血忌

裏面〔持統天皇三年四月〕

**最古のカレンダー - 2002年石神遺跡出土具注曆木簡 -**

具注曆とは、律令政府によって毎年作られた正式の曆で、「注」を「具」えた曆であったためこのように呼ばれます。曆は陰陽寮(占いや天文を司る役所)で作成され、書写されたものが中央や地方の役所に頒布されました。

この具注曆木簡は中心に穴を穿った円形状ですが、現在の形状は廃棄後に二次利用された際の加工によるもので、本来は長方形の板材でした。表記内容は表裏両面とも上下二段で構成され、上段には日を表す干支(「甲・乙・丙...」の十干と「子・丑・寅...」の十二支を組み合わせる日を示す方法)、下段には一日ごとの吉凶を表す曆注が記されています。日の干支と曆注との組み合わせには規則がありますので、書かれている日付が特定できます。復元作業の結果、表面は持統天皇三年(689)三月八日から十四日まで、裏面は同年四月十三日から十九日までに相当する曆であることが分かりました。今までに見つかった最古の具注曆は神龜六年(729)のものでしたから、この木簡は現在のところ日本で最古の曆ということになります。

現在、東大寺正倉院に奈良時代の具注曆の実物が数点伝わっているほか、平城京跡や地方の役所跡などからも紙に書かれた具注曆が出土しています。しかし、紙の具注曆は長大な巻物の形です。巻物のままでは実用に不便ですから、一年分の曆のうち、当面必要な部分を何か別の素材に写しとり、同時に多数の役人が曆を見られるようにした壁掛けカレンダーのような物が作成されていたと考えられます。この具注曆木簡も、そのような目的で作成されたのでしょう。

律令制度とは、文書による行政の仕組みです。文書には必ず日付を記すので、役人達は今日が何日なのかを知らなくては仕事になりませんでした。時間の概念に縛られた生活が、この頃から既に始まっていたのです。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 竹内 亮)



- × (庚力) 執
- × 申丸
- × 辛酉破
- × (破) 上玄 虚厭
- × 壬戌皮
- × (危) 三月節急盈九 ×
- × 癸亥色
- × (甲力) 馬牛出棕
- × 子成
- × (乙力) 絶紀帰忌
- × 丑収
- × (開力) 天間日
- × (血力) 忌

表面 持統天皇三年三月 ]

(原寸)

表面 持統天皇三年三月 ]

三月大	
一日癸丑開	九坂天倉
二日甲寅閉	帰忌
三日乙卯建	厭対天李
四日丙辰除	
五日丁巳滿	重
六日戊午平	
七日己未定	血忌
八日庚申執	
九日辛酉破	上玄岡虚厭
十日壬戌破	三月節急盈九坂
十一日癸亥危	重馬牛出棕
十二日甲子成	絶紀帰忌 □天倉
十三日乙丑収	天間日
十四日丙寅開	血忌 厭対
十五日丁卯閉	
十六日戊辰建	
十七日己巳除	重
十八日庚午滿	天李
十九日辛未平	
廿日壬申定	厭
廿一日癸酉執	
廿二日甲戌破	九坂
廿三日乙亥危	重
廿四日丙子成	帰忌天倉
廿五日丁丑収	三月中
廿六日戊寅開	血忌厭対
廿七日己卯閉	
廿八日庚辰建	
廿九日辛巳除	重
卅日壬午滿	往亡天李

(黒の部分が表記内容)

卅日壬午滿	忌
廿九日辛巳除	重
廿八日庚辰建	
廿七日己卯閉	
廿六日戊寅開	血忌厭対
廿五日丁丑収	三月中
廿四日丙子成	帰忌天倉
廿三日乙亥危	重
廿二日甲戌破	九坂
廿一日癸酉執	
廿日壬申定	厭
十九日辛未平	
十八日庚午滿	天李
十七日己巳除	重
十六日戊辰建	
十五日丁卯閉	
十四日丙寅開	血忌 厭対
十三日乙丑収	天間日
十二日甲子成	絶紀帰忌 □天倉
十一日癸亥危	重馬牛出棕
十日壬戌破	三月節急盈九坂
九日辛酉破	上玄岡虚厭
八日庚申執	
七日己未定	血忌
六日戊午平	
五日丁巳滿	重
四日丙辰除	
三日乙卯建	厭対天李
二日甲寅閉	帰忌
一日癸丑開	九坂天倉
三月大	

## 退官者のひとこと

### おかげさまで停年です



金子裕之さん

この3月末に、停年を迎えることとなった。エキスポ'70の年に学校を出て、35年。よくここまで来られたものである。この間、古代史を学ぶ者には垂涎<sup>すいぜん</sup>的<sup>ま</sup>である平城宮跡や藤原宮跡の大極殿・朝堂院など古代の宮殿や、法隆寺、興福寺などこれまた超がつくお寺の数々、さら

には長屋王邸など希有な遺跡の発掘に立ち会えたことは、幸いであった。この日を無事に迎えることができることを含め、多くの方々のおかげである。この機会に、お礼を申し上げたい。

それにしても、ここ1・2年、年度末が来るたびに思い起こすのが3年前の老妻の、あのひと言。

「どうするの?」突然のことに、目を白黒させる私。

「明日までなら3,500万。4月になったら500万。だからどうするの、と聞いているの!」

保険金のことだった。掛け金は低いが、期間内に死亡すればそこそこの保険が下りる代わり、過ぎるとガタンと下がる「定期付終身保険」である。めったに病気はしないが、ゴロゴロといつも雷が鳴るわたしのお腹。それを気に病んで若き日の老妻が、幼い子の行く末を案じて、やり繰りしていたのだ。

幸か不幸か(?)、こんにちまで命ながらえ、なんとか退職金がいただけそうである。保険金とそれなりに相殺されるせいか、老妻にいまのところ、不満はないらしい。

しかし、一難去ってもまた難題が。

「いま、忙しくて・・・」

毎日が日曜日になる4月からは、いままでのサボりの理由は通じない。さて、どうするか・・・。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 金子 裕之)

### 退官に寄せて



渡邊康史さん

私は、平城宮跡資料館が開館した昭和45年の夏の終わり頃に採用となり、以来34年余の奈文研生活を送らせていただきました。

入所当時の平城宮跡は、目につく建物として遺構展示館と資料館及び第1・2収蔵庫だけが建設されており、見渡す限り草原だという印象

でした。ただ、遠く大極殿土壇上に1本の松が、風雨や火災になんとか耐えて踏ん張っており、平城宮跡のランドマークとなっていました。

平城宮跡資料館は、平城宮跡発掘調査部の庁舎でもあり、各調査室が並んでおりました。毎日、その日の発掘調査の状況や問題などが、話題となり、議論され、対策や次の日の行動方針などが熱く語られておりました。発掘調査というものを全く知らなかった私は、お陰で自然に勉強させてもらえることができました。当時の先輩たちが、大変な個性と平城宮跡に強い思いを持った人たちであり、怖い存在でもありましたが、実に多くのことを教えていただいた思いが強くなりました。

整備では、水鳥が集まる水辺を造り、子連れの水鳥を見た時には本当に癒されたものでした。その後、基本構想の発表もきっかけとなり、平城宮跡の整備事業予算が何段階かで増えていきました。特に平成5年から「朱雀門」及び「東院庭園」の復原が同時にスタートし、これまでにない事業規模にとまどいも多く、研究所あげでの取り組みで完成することができました。さらに現在進行中の「大極殿」復原をスタートするまで、参画できた幸運は、私の人生において、まるで三段跳びをしているかのような感じでした。ふり返ってみますと、濃い中味であったと思いますが、一瞬だったような気がしております。

先輩方をはじめ、現奈文研の方々、協力いただいた地元の皆様、そして現場で実際に工事を進行していただいた方々など、多大なご迷惑をおかけしたにもかかわらず、気持ちよく応援いただいたことに、強くお詫びと感謝の気持ちで一杯でございます。本当にありがとうございました。

(平城宮跡発掘調査部 渡邊 康史)

退官に寄せたつづやき



田辺征夫さん

退官？、ん、退職？まだ公務員だから退官でいいのか、と迷わせるところが、今の置かれた状況を物語っている。勤務年数は35年と9ヶ月。若い頃のサッカーによるひんぱんな怪我以外、幸いにして大病を患うこともなくここまで来ることができた。

意外と丈夫にできているのだなあ、と思ってしまう。こう言うと、怪我の時に長く入院し、まわりに大きな迷惑をかけたので、勝手なことを言うな、とのお叱りを被りそうだ。

話のネタも語り尽くせないほどあるが、どうせ中途半端になるからやめておく。私の場合は、幸か不幸か、奈文研一筋ではなかったもので、その「思ひ出」も複雑である。研究所をわりと醒めてみているところもある。ひとつ間違いないことは、20年以上前は、ほんとにゆったりした職場だったし、今も、まだ他所と比べるとそういう雰囲気は残っている。しかし、外から見ると同質社会の閉塞性、危うさ、脆さも垣間見える。要注意。

ところで、研究所に入ったときに持っていたもので何が手元に残っているかと考えてみると、ほとんどない。勤めてから数年後に、大奮発して買ったモンブランの万年筆か、ニコンFぐらいかな。ニコンFは、今やカメラバックの中で静かに眠っている。もちろん家電製品など何度も買い換えている。人事異動のせいも、引っ越しが多く、家具はよく傷み、かなり変わってしまった。世の中では、1969年式の車などほとんど見かけないが、こちらら立派な69年式だ、とずっと威張ってみたい気がする。

最近、キトラや高松塚のカビ議論で教えられた。最も単純で原始的な生き物が一番丈夫であるらしい。そこで、老後は、今以上に単純化して・・・、つまりさらにぼーっとすることによって長生きできないか、などという詰まらぬことを考えてしまう。本当のカビにならないように、と言われそうだ。

(埋蔵文化財センター 田辺 征夫)

秋田県・胡桃館遺跡出土木簡の釈読

胡桃館遺跡は、秋田県北部の北秋田市(旧、鷹巣町)に所在し、シラス層下に埋もれた古代の建物が、当時のまま出土した埋没建物遺跡として知られています。古代建築史研究の上で、十和田火山噴火の実年代を確定する上で、貴重な遺跡とされてきました。昨年の夏、この遺跡から出土した木簡が研究所に保管されていることに気付き、出土から37年ぶりに釈読を試みたのです。

木簡は、1辺約220mmのほぼ正方形の板に、表裏両面にあわせて70字以上の文字が書かれたものです。内容は米を支給した帳簿で、9世紀後半頃の米代川流域に生きた人物の名もみえます。その一人「玉作たまづくりの麻呂まろ」は、元慶の乱に登場する同姓の俘囚の長「玉たま作たくりのむつまる正月曆」との関連も推測されます。胡桃館木簡は、風変わりな釈読の経緯もさることながら、律令国家の支配領域や北東北古代史の理解に一石を投じる資料として、論議をよぶことになりました。今後、調査研究の深化が期待されます。

2004年2月、史料調査室は、過去100年間に出土した31万点余に及ぶ全国の木簡出土情報を、『全国木簡出土遺跡・報告書総覧』としてまとめました。その際、釈読が尽くされないまま保管されている、多くの木簡を再認識しました。胡桃館木簡もその一例なのですが、最新の赤外線機器の技術や、釈読の助けとなる類例の増加に支えられ、過去の調査をみつめなおすという一見地味な作業の積み重ねが、今回の解読や地域の宝の掘りおこしに結実したのだと思います。(平城宮跡発掘調査部 山本 崇)



釈読された木簡(表面) < 赤外線デジタル写真 >

## 飛鳥資料館のみどころ (8)

### 春期特別展示

#### 「飛鳥の奥津城 - キトラ・カラト・マルコ・高松塚 - 」

飛鳥資料館では、毎年春と秋の2回、特別展示をおこなっています。平成17年度の春期特別展示は、明日香村との共催で、「飛鳥の奥津城 - キトラ・カラト・マルコ・高松塚 - 」と題して、平成17年4月16日(土)から5月29日(日)の期間(会期中無休)で開催します。

当館は飛鳥地方の歴史と文化を紹介する歴史系



高松塚古墳の出土遺物

博物館として昭和50年に開館し、これまで飛鳥時代にかかわる文化財や発掘資料の公開と展示をおこなって参りました。

飛鳥地方の歴史と文化を考える上で欠かせない視点のひとつが、飛鳥人の奥津城であった終末期古墳と呼ばれる独特の形

式をもった古墳です。

飛鳥ブームの火付け役となった高松塚古墳の発見以降、中尾山古墳、束明神古墳、マルコ山古墳と相次いで特徴ある終末期古墳が発掘調査され、大きな話題となっています。ここ数年は、第二の壁画古墳の発掘調査として、キトラ古墳の発見とその調査が注目を集めています。

今回の展示では、これら飛鳥の終末期古墳をとりあげ、高松塚古墳出土品やキトラ古墳出土品など、その出土遺物を一堂に会するとともに、奈良時代の火葬墓への移行をご理解いただけるような展示を予定しております。

また、展覧会を記念してシンポジウム「文化遺産とともに - 相次ぐ新発見の意義とその活用 - 」を下記日程にて開催いたしますので、あわせてご来聴いただければ幸いです。皆様のご来館をお待ちいたしております。

(飛鳥資料館 西山 和宏)

### <シンポジウム>

4月24日(日)午後1時から(要事前申込)

会場 / 明日香村中央公民館大ホール

詳細は、明日香村教育委員会にお問い合わせください。

## 記 録

### 埋蔵文化財センター研修

陶磁器調査課程専門研修

2月15日～2月22日 10名

自然科学的年代決定法課程専門研修

2月28日～3月4日 7名

動物考古学課程特別研修

3月10日～3月15日 12名

### 発掘調査現地見学会・説明会

飛鳥藤原第133 - 12次(史跡川原寺跡)

発掘調査現地見学会

平成17年2月22日(火) 600名

飛鳥藤原第137次(高松塚古墳)

発掘調査現地説明会

平成17年2月27日(日) 2,000名

平城第381次(平城宮跡東院地区)

発掘調査現地説明会

平成17年3月19日(土) 1,086名

## お知らせ

### 木簡字典

木簡画像データベース「木簡字典」を公開しました。

<http://jiten.nabunken.go.jp/>

### 飛鳥資料館のトップページ

次のリンク先を新規開設しました。

<http://www.nabunken.go.jp/asuka/index.html>

## ミュージアムグッズ

平城宮跡では、鬼瓦のレプリカ、平城宮絵ハガキを新たに作成し販売しています。

## ミュージアムぐるっとパス・関西2005

入場券、割引券が1冊に綴られているパスを発売

飛鳥資料館など関西60の博物館などを1,000円

で使用開始から2ヶ月間有効。発売は各施設窓口。

4月から1年間使用可能。各施設のガイドブック

としても便利。問合せ:075-531-7504

## 講演会(NPO平城宮跡サポートネットワークと共催)

平成17年5月15日(日)午後3時30分～

於:平城宮跡資料館講堂

「高松塚古墳と平城京」

白石太一郎 教授(奈良大学)

## 公開講演会

平成17年5月21日(土)午後1時30分～

於:平城宮跡資料館講堂

田辺 征夫 所長

加藤 真二 飛鳥資料館主任研究官

馬場 基 平城宮跡発掘調査部研究員

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp>

Eメール [jimu@nabunken.go.jp](mailto:jimu@nabunken.go.jp)

発行年月 2005年3月